

2020年横浜ナザレン教会・聖霊降臨祭礼拝説教
「霊の思いのうちに」使徒言行録2:1～4、ローマ書8:1～11

【聖書】

使徒言行録2:1五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。ローマ書 8:1 従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。2 キリスト・イエスによって命をもたらし霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。3 肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。4 それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした。

5 肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。6 肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。7 なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従いえないのです。8 肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。9 神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にあります。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。10 キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。11 もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。

1 霊では共にいる

新型コロナウイルス感染拡大によって、私達は外出を控え家族以外の人々との接しないように過ごしてきました。そんな中、顔と顔を合わせての人との触れ合いが普段の生活に大きな比重を占めていた事に気づかされた方もいるのではないのでしょうか。しかし何といっても約二か月の自粛期間、私たちが心に覚えた事は礼拝のことではないかと思えます。神によって一つの会堂に集められ、礼拝を献げる事ができなくなって、礼拝する意味を改めて自分の事として考えるようになった方もおられるのではないかと思えます。私もそうです。この自粛期間中、ずっと私の心に響いていた言葉があります。パウロの弟子と考えられている人が遠く離れたコロサイ地方の諸教会に書き送った「**体は離れていても霊ではあなたがたと共にいる**」(コロサイ2:5)という言葉です。ばらばらに散らされた信仰者をつなぐもの、それが父なる神、子なるキリスト・イエスのもとからやってきた霊、聖霊だとコロサイ信徒の手紙の作者は言っています。私達を、神の民を一つにする聖霊とはいったいどのようなお方なのか？聖霊降臨を記念して捧げられる

今朝の礼拝で、ローマ信徒への手紙第8章のみ言葉に新たに聞いていきたいと思えます。

2 聖霊とは？

聖霊とは、いったいどのようなお方なのか？父、子、聖霊の神、三位一体の神という時、創造主なる父なる神、子なるキリスト・イエスはなんとなく分かる、でも聖霊なる神はどうもよくわからないという言葉をよく聞きます。「聖霊とはなんですか？」とは、教会の信仰に興味を持つ人から牧師がよく受ける質問の一つです。その際、よく引用されるのは、「**聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです。**」(コリント I 12:3)というパウロの言葉です。現代日本に生きる私たちが、2000年前に遠い中近東でナザレ人イエスが架かってくださった十字架という極刑により、自分の罪が赦され救われた、イエスは自分の救い主、キリストだと、普通に考えたら受け入れる事はできません。ですから、イエス・キリストへの信仰、それじたいが霊なる神、聖霊のお働きだと言うパウロの言葉は説得力を持ちます。

3 心の一隅

では、聖霊という霊なる御神はどのように私達の内にも働いてくださるのでしょうか。新約聖書では、イエス様を救い主と告白して洗礼を受けると、霊なる神、聖霊が私達の内にも与えられる…と語られています。聖霊はいったいどこに來てくださるのでしょうか。

森有正という方の言葉が参考になろうと思います。前に一度紹介した言葉ですが、何度でも共に聴きたい味わい深い言葉なので、再び取り上げてみたいと思います。森有正という方は、牧師の息子でキリスト者だった哲学者、文学者です。敗戦後、欧米への留学ができるようになると、まっさきに東大からフランスに派遣されたほど優秀な人でした。しかし、留学の期間が終わっても日本に帰って来ず、当時の東大の先生がたを激怒させる事件となり、帰国を待っていた妻とは離婚することとなります。かなりの年月がたった後に、ようやく日本に來られるようになった森先生は、大好きな旧約聖書の登場人物・アブラハムについて、国際基督教大学で「アブラハムの生涯」と題して連続の講演をなさいました。先生は、その中でこういうふうにご話しておられるそうです。「人間というものはどうしても人に知らせることのできない心の一隅を持っております。醜い考えがありますし、また秘密を抱えたり、また密かな欲望がありますし、恥がありますし、どうも他人に知らせることができない、ある心の一隅というものがあり、そういう場所でアブラハムは神様にお目にかかっている。そこでしか、神様にお目にかかる場所は人間にはない。人間が、誰はばからずしゃべることのできる観念や思想や道徳やそういうところで人間は誰も神様に会うことができない。人にも言えず、親にも言えず、先生にも言えず、自分だけで悩んでいる、また恥じている。そこでしか人間は、神様に会うことはできない。」

皆さんもそれぞれ、このような心の一隅というものを持っていると思います。自分だけが知っている秘密の場所で、親にも友人にも先生にも、夫にも妻にも子供にもきょうだいにも言えない、自分の醜さがはつきり出ているところ。しかし、神はそこで私たちと出会ってくださる、もっと神に来てもらいたいと私達が思う他の所では神は会ってくださらない、この言葉は真実であると私は思います。私も誰にも見せたくないような自分の深い心の一隅で神が出会って下さいました。森先生が仰る「心の一隅」、これを別の言葉で言うことはなかなか難しいことですが、「魂」と言い換え得る場所ではないかと思います。

4 人を神とする

私達人間には神なしで自分の思い通り自由に生きたい、自分を神として生きたい…と願う心があるように思います。そしてこの自己中心的な思いは私達の「魂」を固く捕え、分かちがたく覆っているように思います。だから、私たち一人一人が作る世界は、自分たちを神とする社会です。古代世界の諸々の神々は、人間がつくった偶像なる神々。人間が神々を作り出す、人間が創造主となり、自分達の願望を投影するのです。豊作にしろ、安産にしろ、戦争に勝たせてくれ、他にもあれをしろ、これをしろ…神々に命令する。そうして願いを叶えてくれない神々を棄て去ります。偶像礼拝の本質とは、人間が神となることです。現代世界では、もっとあからさまに人間が神の座に座り全てを取り仕切っています。自分達が神になりたがる思いは、数千年前からちっとも変わらない私たち人間の本質であり、私達の魂は、そのような思いに強く囚われているのではないかと思います。

5 肉の思い

人間を神とするあり方を、パウロはローマ信徒への手紙第8章で「肉」と言っています。まことの神、万物を造られた神を神とせず、自分達を神として欲望を第一として生きる、肉の思いに生きる時、私たちはどうなるのでしょうか。8:6「**肉の思いは死であり**」とあります。この「思い」というのは、独特のギリシャ語が使われています。私たちは時々、ぼんやりと物思いにふけったりしますが、こここの「思い」というのはそういうぼんやりしたものではないようで、ある聖書学者は、「ここで『思い』と訳されている言葉は、はっきりとした方向を持っており、目指すものがある『思い』」と言っています。言葉を変えると、「その思いの内に立ってみると見えて来るものがある」ような思いです。6節の「肉の思い」とは、肉が目指しているもの、見つめているもの…と訳したほうがいいのかもかもしれません。

ですから、「肉の思いは死であり」というのは、自分たちが神になって生きていると何が見えて来るのか？、死が、滅びが見えて来る、滅びへと歩む事になる…というパウロの警告です。自分達を「律法を守る義なる者」とみなし、「律法を守れない者は罪人」と断罪して交わりを絶つファリサイ派や律法学者達の生き方は、やがて自分達の正義を立てる為に主イエスを罠にかけ殺そうとするまでになります。そこで見えて来るのは滅びでしょう。

現代に生きる私達はもっとあからさまな人間中心主義の世界を生きています。その世界は神の秩序である環境が破壊された世界です。17年前の SARS, 8年前の MARS, そして今回の COVID-19、定期的に未知のウィルスが人間界にやってくるのは、人間が神を気取り自分たちの欲望を際限なく追い求め、神の定めた地球環境の秩序を破壊した結果だと言われています。私たち一人一人の個人的な生活もどうでしょうか。神と関係なく生きたい、自分を神としたい思いに生きた時、利害が対立する人を憎み裁き断罪する事度々ですし、他者を自分の利益のために利用したい、支配したいという思いさえ抱き、追い詰められれば実際に人を利用する事さえするでしょう。だからこそ、自分達だけの利益を最大にすると訴え続ける独裁的指導者を好んで選び、国々は争い戦争は後を絶たないのだと思います。現代世界では、超越者を奉じる宗教も「肉の思い」の虜です。「自分達が信じる神が真の神」という事を自分達の力で証明しようというのか、他宗教の信徒達を迫害する事さえあります。

現代世界は「人間を神とする思い」「肉の思い」のうちに滅びへと進んで行っているように見えます。自分たちの力で自分たちを救おうとする律法主義に生きるのも、現代世界のように人間が世界の神として君臨する世界に生きるのも、どちらも肉の思いに生きる事であり、見えてくるのは「死、滅び」なのです。

6 霊の思いは命と平和

しかし、パウロは「**霊の思いは命と平和**」と続けます。先ほど、「思い」とは漠然としたものではなく、はっきりとした方向があり、目指す所がある、そこに立っていると見えてくるものがある…と申し上げました。ここでパウロは、キリストの霊、聖霊に生けると、見えてくるものがある、それが命と平和だと言っています。「平和」という言葉から皆さんが何を想像するでしょうか。私たちの心のあり方、平和な心、穏やかで何の心配事もない状態を平和という事もあるのですが、ここでいう「平和」とは、もっと深い意味があります。「平和」の反対は不和です。不和とは、誰かと争っており、仲直りしていない状態ですから、「平和」というのは仲良くしているということです。ここでは誰と仲良くしているかというと、神なのです。聖霊の思いに生けると神との間に平和が見えてくる、滅びではなく命が見えてくる、私達の肉の思い、自分達が神になろうとする背きの罪を主イエスが十字架上で贖って下さったからです。この主の十字架によって私達は神との間に平和を得ており、神と共にある命が与えられるのです。聖霊の思いに立つと、イエス・キリストが見えてくる…とパウロは言っています。

7 深い所で出会って下さる神

先ほど「私達の心の隅にある誰にも見せられないところで神は私達と出会って下さる」という森有正先生の印象深い言葉を紹介しました。この森先生の言葉とパウロがローマ書で述べている事を併せて考える時、私達には見えて来るものがあります。私達一人一人の心の隅、肉の思いが詰まって恥ずかしくてとても誰にも見せられない所に霊なる神、聖霊が降りて来てくださり、そしてそこでこそ神は私達と出会って下さる、

その神こそ、十字架の主イエス・キリストです。深い死の闇の中に沈む魂を、聖霊の光が照らし出す、そこに見えるのは私達の罪を贖う神の御子の十字架。神はまさに私達の罪の底の底に、御子の十字架を建てられたのです。他の所ではだめでした。そこに立てるしかないから、霊なる形で私達の底の底までやってきてくださるのです。主イエスは、私達一人一人の罪の深淵の底にあって、「我が神、我が神」と叫んでくださいました。神なしでやって行こうという私達の肉の思いのただ中で「我が神、我が神」と叫んでくださった。そして私達の罪によって命を絶たれました。私達が死ぬべき死を私達に先立って死んでくださった。ですが、その三日後、同じイエスが全く新しい命へと甦ってくださいました。私達の肉の思い、深い罪の思いを打ち砕いたのです。そうして、肉の思いに囚われていた私達の魂を解き放って、聖霊の思いの内に立たせてくださり、御子の命と平和を私達に見せて下さいました。父なる神が完全なる義なる方、愛なるお方である以上、私達の最も罪深い所で出会う神は、その罪を十字架で贖う主イエスしかないのです。言葉を変えれば、私達のために独り子を差し出す神の義なる愛と私達は、自分達の最も罪深いところで出会ってくださるのです。

此の事は、パウロは第8章の2節～3節「キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。」という言葉は重なり合い響きあう出来事です。

聖霊なる神は、私達をご自身のもとに置くために私達の深い淵に降りてきてくださる御神であります。人の心の奥底に降るほどに徹底して小さく弱くなられる御神、イエス・キリストのありようそのままです。聖霊とは、まさに見えないキリスト・イエスと言えると思います。

8 霊の支配下

この見えないキリスト・イエスが私達の奥底に降りて来てくださる事によって、私達はキリスト・イエスに属する者となります。8:9～10「9 神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。10 キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。」だからです。

というと、どうも抽象的な言葉に聞こえます。でも事柄は実に具体的で一人一人の経験に現れて来るものです。先ほど共に賛美しました讃美歌333番は、多くのキリスト者の信仰生活を助けてきた讃美歌で、私も助けられた一人です。その333番の一番の歌詞はこうです。「主よ、我をばとらえたまえ、さらば我が霊(たま)は解き放たれん。わが刃(やいば)を砕き給え。さらば我が仇(あだ)に 打ち勝つをえん。」父なる神が私達が握りしめる「憎しみ」など「死を招く肉の思い」を砕かれたのは、「肉の思い」の剣ではありませんでした。神の義なる愛、主イエスの十字架の愛で私達の肉の思いを打

ち砕き、私達の魂を解放して、キリストの霊・聖霊で捕えその支配下においてくださると歌っています。パウロがローマ書8:9～10で語っている事です。

9 イエス・キリストと出会い続ける

このようにキリストの霊の支配下にいれられキリストの者となった私たちですが、肉の弱さを抱えながら、この地上に生きています。「神なんぞいるものか。自分達を第一として生きたらいいんだ」というサタンの声が響き渡り、肉の思いが支配する人間の世界に住んでいます。サタンの声に誘われ神から離れる事もあるし、他者の罪に傷つき呻く事もありますし、憎しみや敵意に自分を委ねたくなることも度々です。だから、私達は、自分の肉の思いとの戦い、霊的な戦いと決して無縁ではられないのです。ですが、私たちはこの霊的な戦いを独力で戦い抜く事は不可能です。キリストの霊、聖霊の力があって初めて戦う事ができるのだと思います。そして、聖霊の導きの中で罪の自分と戦う時、私達には、イエス・キリストとの新たな出会いが与えられます。その都度新しい主イエスと出会うのだと思います。

人生の様々な困難に出会い重荷にあえぐ中で聖霊の助けを借りて主を呼び求める時に、私達の重荷を替わって担って下さる助け主としてのイエス様を知るでしょう。自分を理解してくれる人は一人もいないと思い心を凍らせるような孤独に悩み呻く時、聖霊は友なるイエス様へと導いてくださいます。欲望の誘惑にかられ主イエスのもとを離れ去った時、山を超え谷を超えて探し求め連れ帰ってくれる飼い主イエスと出会うせてくれます。病の辛さに祈りの声もない時、ただキリストのことをひとかけら思うだけで聖霊は呻きをもって祈りの声をあげ、癒し主キリスト・イエスと出会うせてくれます。そのようにして人生のそれぞれの局面で、聖霊の思いのうちに新たに救い主と出会い続けて、キリストの命と平安に属する者として成長していくのです。

先ほど申し上げた333番、2番と3番はそのような内容が歌われています。自分の心が定まらない、どうか父なる神よ、手を引いてまっすぐな道に引き戻してください、自分の力は弱く愛もまた貧しい。どうか父なる神よ、主イエスよ、聖霊を与えて私の心に愛の火をともしてください。そして四番、最後の詩は、「わが全ては、主のものなり、主はわが喜び、また幸なり。主よ、御霊を 満たしたまえ。さらば永遠(とこしえ)の 安きを受けん」—自分は完全に主イエスのもの！333番の作者はそこを目指して歩む信仰者の命の喜びを歌っているのだと思います。

10 共にいる者とする

聖霊は私達一人一人をイエス・キリストへと結びつけるのですが、同じ聖霊を与えられた者どうしをもイエス・キリストを介して結びつけられる事となります。聖霊降臨を描いた使徒言行録2章では、「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」とあります。この「分かれ分かれ」というのは、「別々に、統一されていない」という意味があります。しかし、別々に与えられたのは、一つの聖霊、イエス・キリストの霊です。こうして一つの霊を与えられて、主キリストの支配のうちに導き入れられ、主に結び

付けられ、キリストの民、神の民となります。聖霊が与えて下さる思いに立って命と平和を目指す思いに生きる民となります。

だからこそ、キリストの支配下で一つの民になるとは、何かの型枠にガッシャン・ガッシャンと当てはめるような、画一化とは異なります。それは硬直した教条主義的なやり方であり、そこに生き活きとした命は生まれません。その時代、時代、与えられた課題の中を、それぞれが神から造られた代わりがきかない存在だと尊重しあい、それぞれ神からいただいた賜物を出し合い、共に働いていく。人間の知恵や力だけで出来る事ではありません。キリスト・イエスの十字架を通して神を仰ぎつつ、進む道です。そこにキリストの霊にある新しい命と平和が生まれ続けるのだと思います。このような聖霊がもたらす命と平和の思いに生きる群れこそ、キリスト・イエスの支配のもとに生きる神の民、教会だと思います。キリストに結びつけられた者、聖霊の支配下にある者どうし、主の十字架のもとでお互いに切磋琢磨し励まし合い共に成長していきます。使徒言行録はそんな神の民の様子を描いています。聖霊を与えられたペトロやヨハネ、ヤコブをはじめとした弟子達、後にはパウロも加わって、厳しい迫害のもとにあり、与えられた様々な立場により時には喧嘩しつつも、一人一人がキリストと出会い続け、与えられた召命に誠実に生きて、それぞれの場所で教会を発展させていった道のりが描かれています。

こうして、それぞれが一つのキリスト・イエスの霊にしっかりと結びつけられるからこそ、冒頭の言葉「**体は離れていても霊ではあなたがたと共にいる**」(コロサイ2:5)事が可能となります。しかし、これは聖霊の働きによる事ですから、人間が自由にできることではありません。聖霊は霊なる御神でありますから、私達がコントロールすることはできないのです。だからこそ、私達は自粛期間中それぞれに散らされた場所で、「体は離れていても霊では共にいて礼拝を献げることができますように」と心からの祈りを献げるのです。そうして私達はまた新しいキリストと出会い続けます。

神は、キリストの霊の支配下にある者の祈りを必ず聞いていてくださいます。罪ゆえに分かり合えず孤立して生きて滅ぶしかなかった私たち一人一人を十字架と復活の主イエス・キリストと出遇わせ、聖霊をお与えくださって、キリストの支配の内に共に生きる神の民としてくださる父なる御神を心から崇め賛美したいと思います。